
LEGEND

リオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND

【Nコード】

N5467J

【作者名】

リオ

【あらすじ】

古の伝説。

魔を祓い、自らを犠牲にした少女――。
再び魔が目覚める時、伝説は甦る。

一部性描写あり。伝説の戦士♀、魔族♂、王、王子、天使兄弟が織り成すドキドキの恋愛ファンタジー。

プロローグ

荒野の中、聳える漆黒の城。そこからは禍禍しい魔の力が流出していた。

ここは、人間には生きることの出来ない闇の支配する世界――。

城内。内部までもが闇色。松明がぼつぼつと僅かな光りを生み出している。

長い廊下を歩く影が一つ、大広間に向かっていった。

「来たか……」

大広間の奥、荘厳な椅子に座り、城と同色の髪とドレスを纏う、厭らしくも美しい女。

「御呼びでしょうか」

その女の前にまで歩み寄り、跪く男。

男はこの世界には似つかわしくない、肩までの癖のあるオレンジの髪、赤い瞳という鮮やかな色を持っていた。纏う黒いコートに、それらはいやに映える。

「ほう……暫く見ないうちに、随分と美しく成長したものだな」

男をマジマジと見た女はそんな言葉を零し、ゆっくりと立ち上がる。そして段差を降り、男のすぐ前に立った。

「立て。エイル」

「はい」

男、エイルは立ち上がる。スラリとした細身の長身。女は、エイルの胸元に身を寄せた。

「髪を切ったのだな」

「はい……」

女は顔を上げ、エイルの頬に掌を添える。引き寄せ、薄く形の良

い唇に口づけた。

「久しぶりだ。お前にこうするのも」

再びエイルの胸板に擦り寄り、女は目を閉じる。

「長かった。あの小娘のせいで、私は千年という時を無駄にした。今回呼び出したのは他でもない、あの小娘を魔族に引き込め。もし奴も目覚めていたのなら……逆らうのならば、殺せ」

「仲間として欲する程の力を持つ女なのですか？」

「この私を長い眠りにつかせたのだ。間違いなく、今の人間界では最強……我等魔族の脅威」

「分かりました……」

命を承知したエイルに、女は満足したように妖しい笑みを浮かべた。

「期待しているぞ」

「行って参ります」

女が離れると、エイルの姿は瞬間的に消え去った。広い闇の空間に残された女の笑い声が、高らかに響いた――。

1【伝説の戦士】

晴れ渡る青空。賑やかな城下街。栄えるルーン国の中心に、白く壮大な城があつた。

平穏に見えるこの世界を、城の空中庭園から深刻な面持ちで眺める王子、レリス。ブラウンの髪と瞳が揺らめいている。

その隣には、父である王、レイスがいた。レイスは、レリスと兄弟にみまごう程に若い容姿。色素の薄い淡いグリーンの髪と、息子と同じブラウンの瞳。その端整な顔は、息子にも受け継がれている。レイスもまた、レリスと同じように眉を顰めて空を見つめていた。「北の大地に、大きな地割れと時空の歪みが突如現れたらしいです」「……そうか。度々起こる地震に、強大な魔の力の波動を感じる。これは……」

「これは？」

レイスは俯き、言い淀む。口にするのは悍ましい推測を、レリスは催促する。

深く溜め息を一つ吐き、レイスは再び空を仰いだ。

「封印されていた魔王が、ついに目覚めた」

「そ、れは……事実ですか？ 父さん」

「いや。だが、今まで感じたことのない、震え上がる程に禍々しい力……そう推測するしかないだろう」

「そんな……」

レリスは、血の気が引いていくのを感じた。幼き頃から聞いてきた、この世界の歴史、魔族が支配していた世界、それが再び訪れる恐怖。

だが、一つ希望がある。魔王を封印し、世界に平和を齎した戦士がいた。それを、レリスは思い出す。しかし――。

「戦士が世界を救った伝説は、遙か昔……」

「そうだな。だが……」

レイスは、城の最頂部、細く高く聳える塔を見上げた。階段も梯子もない、ただ小さな窓だけがあるそれを。

「伝説の戦士は、あそこに眠っている」

「え!？」

眠っているというのはおかしな話だ。戦士が魔王を封印したのは千年も昔のこと。

「生きているはずが……」

「だが生きている。我等の先祖は戦士を塔の一室に奉った。戦士は封印術の反動で己さえも封印されることになり、昔と変わらぬ姿で眠っているという」

「そんな、ことが……」

有り得ない、と呟いて、レリスも塔を見上げた。上る手段のない、完全に封鎖されたそこに、伝説の戦士が――。

「戦士があそこで眠っているとして、どうすれば良いのですか」

視線をレイスに移したレリスは、そう問う。その目は、何も手立てはないだろう、そう言う目をしていた。

レイスは、くるとレリスに背を向ける。

「ルカ、アル、いるか」

「はい」

「いますよー」

木々の中に身を隠すようにしていたルカとアルが、姿を現した。

二人とも色素の薄い金の長い髪を襟足で一つに束ね、深く青い瞳をしていた。顔の造りは似ているが、ルカは鋭く切れ長の目、アルはぱっちりとした幼い目、他は共通して細く高い鼻梁に、薄い唇。二人からは、どこか神々しさを感じる。

「御呼びでしょうか」

ルカとアルは、王と王子をいかなる時も守る守護者。二人は王であるレイスの前で跪いた。

「お前達に、大事な任務がある。この世界がかかっていると言って

良い任務だ」

「はい。なんなりと」

王レイスの言葉に応じるのは真面目なルカ。ルカの弟であるアルは、キョトンとレイスを見上げていた。

レイスもレイスの真意が分からず、自らの側近達に何があるのかと考えを巡らせなが、レイスを見た。

「レイスには伏せていたが、この者達は、魔族に滅ぼされた天上人の生き残りだ」

「天上人……！」

レイスは驚愕に見開いた目をルカ達に向ける。俄かには信じがたい。レイスは、天上人など、とうの古に滅んだと思っていたからだ。「ルカもアルも、お前が幼い頃から、姿形が変わらぬだろう？」

「それは、父さんも術で！」

「彼らは術など使っていない。人とは違う時の流れで生きる者……人間ではない」

「ルカと、アルが……」

信じられないとばかりに、レイスはルカ達を見遣った。見た目は人間そのもの。特別色素が薄いとは思うが、やはり人間にしか見えない。レイスは頭を抱えた。

「それが事実なら、何故天上人が我らの側近を？ 何故ここに、人間界にいるのです」

「ルカにもアルにも、帰る場所はない。魔族によって破壊し尽くされたからな。彼らは命だけは助かり、滅んだ天上界から人間界に降りてきた。その時、ボロボロだった彼らを保護したのはルーン国の初代王。それ以来、ルカとアルは王、王子、それぞれの側近として生きている」

レイスの話を聞き、レイスは押し黙った。今まで当たり前のように居た、遊んだりくだらない話をしたりした友達のようなだったルカとアルに、そんな酷な過去があったなんて。それを知らなかった自分が、悔しかった。

しかし今は自分の感情に飲み込まれている場合ではない。

「父さん。ルカとアルを呼んだ訳は……」

「ルカ達は、人間とは桁外れの神力を持っている。そして彼らは、高等神聖術が扱える」

レイスがそこまで言っても、レリスには訳が分からなかった。

「どういうことですか？」

レリスの問い掛けに、レイスはふう、と細い息を吐き。塔を仰ぎ、それを指差した。

「魔族が本格的に動き出す前に、ルカとアルには戦士の封印を解いてもらう」

「封印を……解く……」

レイスの指に導かれるようにレリスも塔を見上げ、古の伝説が現実となるかもしれないことに、ごくりと喉を鳴らした。

2【魔族襲来】

「お前達の解印術で、戦士の封印を解いてくれ」

レイスがそう言つと、強い風が庭園を過ぎ去つて行つた。それはまるで、これから起こる災厄を予兆しているかのように、皆が切迫した表情を浮かべた。

「りょーかい。じゃ、行くか、兄貴」

「ああ」

アルはそんな雰囲気中、おどけて敬礼してみせる。それに返事をしたルカは、呆れたように溜め息を吐いて立ち上がった。

「行くつて、どうするんだ。あそこまで届く梯子なんてないぞ」

当然の疑問をレリスは投げかける。アルはレリスを一瞥し、無邪気な笑顔を作つた。

羽根が、舞つた。鳥のそれよりも大きな純白。はらはらと雪が降るような幻想的な光景に、レリスは見とれた。そして、ルカとアルの背に現れた無垢な翼に、目を見開いた。

大きな翼を羽ばたかせ、ルカとアルは舞い上がる。伝説の戦士の元へ、昇つて行く。

「天上人には、翼があるのか……」

レリスは無意識に、言葉が零れた。

「天使の絵があるだろう。あれは、天上人が気まぐれに人間界へと降り立つた時、その姿を見た者が神の使いと思い、描いたそうだ」

絵本の世界に迷い込んだ感覚で、レリスはルカとアルの天使の姿に魅入っていた。

「開いた……」

塔の窓にまで到達した二人。それには鍵はかかっておらず、引くと、ぎいっという音を立てて開いた。

室内に明かりはないが、太陽が優しく照らしている。ひらりと中に入り込み、二人は翼を消した。

「これが……伝説の戦士だと？」

「うわぁ……」

ル力は啞然とし、アルは瞳を輝かせる。

室内には、天蓋の付いたベッド。そこに横たわるのは、一人の少女。青く長い髪、桃色の唇、華奢な身体。伝説と謳われた戦士は、眩しい程に美しい少女だった。

暫く、二人は少女の姿に茫然と立ち尽くしていた。

ふと我に返ったのは、ル力。気を引き締め直し、少女に両掌を翳す。

「やるぞ」

「う、うん」

ル力はベッドを挟み左の窓側、アルは右に回り、ル力と同じように掌を翳した。

解印術は、高等神聖術の中でも難しいもの。失敗は、許されない。二人の掌から、まばゆい光が放たれた。それは少女を包み込み、術を解こして行く。その光は窓の外にまで溢れていた。

「始まったか」

塔を見上げるレイスとレリス。解印術は、少し時間を要すると聞いていた。無事に終わってくれと、レイスは祈った。

その時だった。城に、強大な魔力が近付いてくるのを、レイスとレリスは感じ取った。

「と、父さん！」

「慌てるな」

魔族は、動き出していた。目的は、伝説の戦士であろう。

だが、戦士は人間の希望、光。その光を消させるわけには行かない。

城下街とは反対方向からの威圧感。レイスは向き直り、レリスをその背に隠した。

宙に浮かぶ一人の男が見える。男はレイスに掌を翳し、炎を纏った熱量を放ってきた。

レイスは咄嗟に周囲にバリアを張り、何とかそれを受け、弾き飛ばしたが、ガクリと片膝をつく。

「父さん！」

「魔族……か！」

「ご名答」

ゆっくりと近付いてくる魔族は、服こそ黒であるが、柔らかそうなオレンジの髪に、赤い目をした、恐ろしい程に妖しく美しい容姿。魔族とは思えぬ姿、人間の姿そのものだった。

「我が名はエイル。我等が王の命により、女をもらいに来た」

エイルと名乗った魔族は、じわじわとその距離を縮める。翳された掌は、いつ放たれるか分からない赤い光りが集約されていた。

「女、とは、何のことだ」

膝に手をつき、レイスはゆっくりと立ち上がる。そして、目の前の魔族を睨み据えた。

「白を切るのか？ あんた達の大事な、伝説の戦士……ここにいるんだろ？」

エイルはニヤリと口角を上げる。翳していた手を握り、人差し指を立てると、レイスに向けた。

「どこだ」

「教える訳にはいかない。戦士は、我等の希望なんだ」

「あ、そ」

つまらなさそうにレイスを睨み、エイルは指をひゅい、と上へ動かした。そこから赤い刃が発生し、レイスに襲いかかると左肩を切り裂いた。

「ぐあああ！」

衝撃に、レイスは後方へ倒れ込む。

「父さん！」

慌てて駆け寄ったレリスは、父の肩の傷に治療術を施して行く。それは神聖術であるが、神力の弱いレリスでは、レイスの傷は塞がらない。

ざっくりと切り開いたような傷。とめどなく鮮血が溢れ出し、レイスは激痛に歯を食いしばる。

そんな中、エイルは太陽とは違う、神聖な光りが注いでいることに気付いた。視線を上に向け、塔を見付ける。窓から漏れるまばゆい光り。

「あそこか」

「ま、待て！」

エイルは翼もないのに塔の窓へと昇って行く。それを何とか食い止めようとレイスは立ち上がろうとするが、出血量が多く、ぐらりと倒れ込む。

「くそつ、これしきのこと……！ ルカ、アル、間に合ってくれ……」

もはやレイスに魔族を阻む力は残っていなかった。ルカとアルに、希望を托すことしか出来なかった。

塔内部。目も眩む程の光りが溢れ、それは眠る少女を取り巻いている。

ルカとアルは目を瞑り、全神経を掌に集中させていた。

——もう、少しだ……。

解印術は、相当な神力を使う。二人の持てる力全てを注ぎ込まなければ無理な術だった。

ルカとアルは、苦しげに眉を顰めている。

そう、もう少しだった。だが、突如、窓から深紅の光りが差し込

み——爆音が轟いた。

塔は、ガラガラと崩れ落ちる。

「父さん……塔が……」

「そんな……」

レイスとレリスが悲壮の色を映した表情で見上げる先は、無惨に崩れ落ちた塔に、紅い炸裂弾を放ったエイルの姿。

「あらら、殺しちゃったかな？」

「勝手に殺すな」

エイルの言葉に返って来たのはルカの声。

「俺もいるぞ！」

そして、アル。

術の炸裂の瞬間、ルカとアルは窓から飛び出していた。ルカは、少女を横抱きにして。

二人の背には、大きな純白の翼。それに相對するのは、黒いコートの魔族。

奇しくも天使と悪魔の絵のような三人は、しばし睨みあった。

3【甦る伝説】

「それが、例の女か。渡してもらおうか」

「誰が渡すか。とっとと消えろ。さもないと」

「さもないと、どうするってんだ？ アンタら、さっきの術で相当へばってんだろ。殺されたくないや、その女を渡しな」

ルカは、きつく少女を抱き直す。エイルの言うように今の自分達には力は残っていない。

少女は、眠ったままだ。解印術が終わる前に襲撃を受けたため、不完全なものとなり、失敗した――。けれど、術は失敗しても、せめて護らなければと、固く決意する。

――しかし、どうする……。術で力をほぼ使い果たしてしまった。きつと、アルも。

ルカは、己に魔族を退けることが出来ないと悟っていた。よしんば力が残っていたとしても、エイルはルカよりも遥かに強い。

手立てが、ない。ルカは、ぎりりと歯を噛み締めた。

「渡さないってんなら、力付くで行くぜ」

「く……っ」

渡すつもりはない。だが、抵抗することも出来ない。

――これまでか。

ルカはきつく目を閉じる。エイルはニヤリと笑った。すう、と指をルカに向け、それが赤く燃え上がる。

「兄貴！！」

アルは、ルカの身にかかる災いを恐れ、叫ぶ。

だがそれも虚しく、指から放たれた火炎を纏った球体が、凄絶な勢いでルカに迫った。

やられる。ルカはそう思った。しかし攻撃は青い光りにぶつかり、その熱量を分散させた。

「何!？」

「……え」

ルカは、予想外の事に目を瞬かせた。抱いている少女が、その右腕を伸ばし、バリアを張っていた。

解印術は、失敗に終わったと思われるが——伝説の戦士の、大きく深い青の瞳を開かせた。

「やった……やった!」

その光景に、解印術の成功に、アルは歓喜の声を上げる。

「目覚めたのか……」

ルカがぼつりと呟くと、少女はバリアを解き、ルカを見遣って微笑んだ。

「中々やるようだな。あの方が欲しがる訳だ」

エイルのその声に、少女は表情を変えた。睨むようにエイルを見ると、初めて口を開く。

「まだ、私を仲間にしようとしているの?」

「何だ、前にもお誘いがあったわけ? その通りだよ」

いつの間にか、エイルの顔から笑みは消えていた。

「来てくれないかな、お姫様。断るなら……殺すよ」

何故か、悲しげな笑顔を浮かべたエイル。その表情に、少女は一瞬困惑したが、すぐに強い眼差しで言った。

「私は、魔族の仲間になんて死んでもならない」

「死なれちゃ困る」

ルカは思わず口を挟んでしまった。

「死んでも仲間にはならない、か……じゃあ」

すーっと、エイルは宙を移動し、少女へと手を伸ばす。

ルカは咄嗟に、庇うように少女を抱き込んだ。だが、エイルは何か危害をくわえようとはせず、少女のサラッとした長い髪を掬った。

「名前教えて」

「……は?」

全く予測していなかった台詞に、ルカは耳を疑い、少女はキョト

ンとする。

「アンタ可愛いから、今回は見逃してやる。その代わり、名前」

魔族に名乗る名前など持ち合わせていない、とは思っても、やり合えばただじゃ済まない相手。見逃すというのは本当かどうか分からないが、名乗るだけで、ここにいる人達にもこれ以上被害が出ないのならば——少女の選択肢は一つだ。

「ルーナ」

「ルーナちゃん、ね。覚えてよ」

エイルは満足そうに笑って。掬っていた髪を唇に持っていき、それに口づけた。

「な、にを……」

魔族といえど、エイルは男。そんなことをされて、ルーナは不覚にも顔を赤く染めた。

「それじゃ、またね」

エイルはひらひらと手を振りながら、一瞬のうちに姿を消した。本当に、見逃してくれたらしい。何故かは分からないが、エイルの気まぐれに救われ、ルカは安堵の溜め息を吐いた。

だが、安心したのもつかの間。庭園にいるレリスがルカの名を叫ぶ。

「父さんが……！」

「レイス様……！」

見ると、血まみれのレイスの姿。ルカとアルは降りて行くと、翼を仕舞い、レイスに駆け寄った。

「大丈夫です。今治します」

ルカは倒れるレイスのもとに跪き、白く輝きを放つ掌を傷にあてる。残り僅かだった力を振り絞った。傷口は、徐々に塞がって行く。

「良かった……ありがとう、ルカ」

「レリス様は、お怪我ありませんか？」

「俺は大丈夫だ。父さんが、守ってくれた……」

レリスは、己の無力さが悔しく、拳を握りしめる。ルカは何も言

わず、アルは慰めるようにレリスの肩に手を置いた。

ルーナは、そんな三人を一人離れた所で見ていた。自分が、何故ここにいるのかと思考を巡らせていた。

最後の記憶は、魔王を封印した時。封印術を使えば、反動で己をも封印してしまうことは分かっていた。

庭園から眺めるこの世界、ルーナは何も見覚えがなく、全てが真新しい。おそらく、自分が長い間封印されていたことは理解出来た。目覚めることが出来たのは、解印術を施されたからだということも。しかし何故、今封印が解かれたのか。何故、魔族がまた自分を狙ってきたのか。それを考えて、ルーナは一つの結論に達する。

「魔王も、目覚めている……」

だから自分は、再び時が動き出したのだと。

ルーナは庭園の鉄柵に手をかけ、遠い空を見つめる。魔王の、確かな胎動を感じていた。

4【青い希望】

暗黒色の世界。聳え立つ闇の城は、王の怒りで震えていた。

「何故命令を無視したのだ！」

「申し訳ありません」

高く響く声を荒げる魔王に、エイルは深く頭を下げる。しかし、王の怒りは鎮まらない。

「利用するか殺せと言ったはずだ！ それを、見逃しただと……！」
王は掌を振り上げ、エイルの頬を打った。

「……っ」

「もう良い！ 今すぐ戻り、あの女の首を持ってこい！ 次は許さ
ん！」

血走る目を向けてくる王の腕を、エイルはぐいつと引く。王はエイルの胸に飛び込む形になり、エイルはその括れた腰を抱いた。

「何を！ ん……っ」

紅く艶やかな唇に口づける。深く重ねると、エイルは舌を滑りこませ、王のそれと絡めた。

エイルは暫く王の口内を蹂躪し、支配した。

「はぁ……エイル……」

今までの怒りは消え失せ、王はうつとりとした表情でエイルの胸板に擦り寄る。エイルは王を抱きしめながら、耳元でそつと囁く。

「命令は後で聞きます。それより、久々に欲しくはありませんか？」

「ああ……お前が欲しいよ」

怒りを打ち消すには、この方法が一番だった。王の剥き出しの肩を撫で、エイルは首筋に唇を這わす。暫く大広間からは、なまめかしい喘ぎ声が聞こえていた。

ルーン国、城の空中庭園では、ルカの治療を受けたレイスが、復活を遂げていた。

「ありがとう、ルカ。すまないな」

立ち上がるレイスは、そう言つてルカに笑顔を向ける。

「礼も謝罪もいりません。レイス様が無事なら、それだけで」

跪き、片方の拳を地につけ、ルカは己の身分に徹した。力を空っぽにしてでも助けたのは、心から信頼し、遵う大事なレイスだから。

「それよりもレイス様。伝説の戦士が目覚めました」

「おお……」

ルカは、庭園から空を見つめているルーナの背に向かい、腕を伸ばす。青く美しい髪が風に靡く様、ルーナの身丈を認め、レイスとレイスは目を丸くした。

「女性であつたか……」

「そのようですね」

「ルーナと言つたか！」

ルカの呼び掛けに、ルーナは振り向いた。アルの、おいでおいで、という手招きを見て、ルーナはゆつくりと四人に歩み寄つた。

「ルーン国王レイス様と、王子レイス様だよ」

ルーナはアルの紹介を受け、その場に跪き、頭を下げる。

「お初にお目にかかります。ルーナと申します」

「そのように畏まらずとも良い。そなたは伝説と謳われた我らの希望。我らこそ、そなたに跪くのが相応しい」

「それは、恐れ多いことです」

レイスは頭を上げないルーナの腕を掴むと、立つように施した。

「ルーナ、魔族から、この世界を守つて欲しい」

レイスのその言葉に、ルーナは何故か表情を曇らせる。目を瞑り、己の身体を確かめるように抱くと、ゆつくり口を開いた。

「今の私では、力不足かもしれません」

四人はその意味が分からず、顔を見合わせた。

「力の半分以上が、封印から解かれています。今の状態では……魔王に勝てない」

四人に、動揺の色が広がった。ル力は、は、とし、齒を噛み締める。

やはり、解印術は完全ではなかった。任を果たし切れなかったと、自分達が原因だと、ル力は目をきつく閉じ、拳を握った。

「しかしそれでも、あなたは強い。あの魔族を追い払ったのだから」
レイスは言いながら、自分は術を防いだけで、力の殆どを使い果たしてしまったことを思い出す。

「私は、ただ攻撃を弾いただけです」

「それでも、あなたからは強い力を感じる。あなたは、まだ戦える。私は当然無理だ」

「君は大きな戦力になる。我々に、力を貸してくれ」

レイスは、ルーナに頭を垂れる。それを見たルーナは大きく慌てふためいた。

「頭を上げて下さい。力になんて、微力ですがいくらでもなります！ だから、そんなことしないで下さい！」

「ありがとう」

ルーナの答えを聞き、レリスは微笑む。そのホツとしたような優しい笑顔を受け、ルーナは申し訳なく思う。本当に、今の自分が役に立つのか不安だった。

「冷えてきたな。中に入ろう。ルーナさんの部屋をすぐに用意させるから、今は私の部屋へ」

「はい。あ……！」

レイスの申し出に返事をしたルーナは、ふいに声を上げた。それに、何か不都合でもあるのか、といったふうに、レイスは首を傾ぐ。
ルーナは、己が役に立てる一つの方法を思い付いていた。今の自分でも何とかなり、且、強力な手立て。

「どこか、広い部屋はありませんか？ 術を試してみたいんです」

「術？」

己の力量を確かめたいのだろうか、レイスと他三人は、当惑する。

「しかし、城が壊れてしまうのでは……」

「大丈夫です」

何も心配はいらないといったルーナに、レイスは未だ疑問を抱えつつ、言われたように、玉座のある部屋に通すことにした。

金銀宝石があしらわれた玉座。レイスの席である。

部屋に入ると、正面奥にそれが現れ、部屋中の絢爛な装飾にも、ルーナは思わず見入ってしまった。しかし、本来の目的は玉座見学ではない。ルーナは顔を左右に振ると、真摯な表情で前を向く。そして、部屋の中央手前まで歩いて行った。

「……何をするんだ？」

怪訝に思うルカは、そう問い掛ける。ルーナがおかしな真似——ここにいる者に危険が及ぶことを万が一にでもするならば——飛び出して阻止するために、ルカは身構えた。

「今の私の力では、やはり力不足です。それを補うための戦力を呼びます」

「呼ぶ？」

ルカは眉を顰めて、じり、と足を僅かに前へ出す。

「魔族を、召喚します」

「なんだと!？」

ルカは目を見開く。危険であることは間違いないだろう。だが、あまりに突拍子もないことに、思考も身体も一時停止した。

レイス達も、まさかそんなことを、と呟きながら、驚愕の表情を浮かべていた。

5【闇に托す光】

「馬鹿なことを言うな！」

止まっていた思考回路が再起動し、ルカはルーナのもとへ足早に向かう。

「ここに魔族を呼び出すだと？　どれだけ危険なことか分かっているのか！」

ルーナの腕をきつく掴み、怒声を浴びせた。

誰かしら反対するだろうと、ルーナは予測していた。だが、怒りを露に止めに入られるとは思っていなかった。

「聞いて下さい！　今、私は力を封印されている状態です。また、部下を寄越したことから、魔王も同じだと考えます」

「同じ？」

「はい。魔王も何等かの形で、未だ封印術の呪縛からは完全に解かれてはいない」

ルカとルーナのやり取りを、他の三人はただただ困惑して、傍観していた。ルカの言う危険、ルーナの言う戦力の増加、そして魔王の封印——それらがどう繋がるのか、皆目検討もつかなかった。

「だから何だと言うんだ」

「私の召喚術で呼び出される魔族は、術者の持つ力と同等か、それ以上。まだ封印の力が働いている魔王にとって、戦力を奪い取られ、尚且つ人間側の戦力が増大するというのは……」

「俺達が有利になる、というのか？」

「そこまでは……でも、私は上級魔族を呼び出すだけのキャパシティーがあります。封印されている力と、もとのからのキャパシティーは関係しない」

上級魔族——魔王の次に位置する、最強クラスの魔族——それが人間側につく。絶大な戦力になるだろうけれど、ルカは首を縦に振

れないでいる。

「魔族が裏切ったら、どうする」

召喚し、もし魔王を倒そうとしているこちらを攻撃してきたら。

その危険性がある限り、ルカは承諾出来なかった。

「それは、有り得ません。術者と魔族は、契約が生じます。それは互いに取り決めた何等かの約束。それを破らない限り、魔族は消滅してしまうため逆らうことはしません」

きっぱりと言い切ったルーナの瞳を、ルカは見つめた。嘘を言っているようには見えない。そこまでは、信じることにした。だが、ルカにはまだひっかかることがあった。

「契約に応じず、危害をくわえてくるということはないのか」

それが、最後の疑心。

「召喚から契約が成立するまでの間、魔族はこちら側とは別次元に留まります。何かを仕掛けてくることは不可能です」

つまり召喚術とは、こちらに利益のある、危険を伴わないものということになる。

ルカは、ルーナの術の知識、それらを使い熟すであろう能力に閉口した。そして、ルーナに背を向けると、啞然とこちらを見ている三人のもとへ戻って行った。

リスクはないが、召喚術の難易度は高い。今のルーナの、持てる力全てを注ぎこまなければ成せない術だ。

皆が離れたところにいることを確認すると、ルーナは目を閉じ精神を研ぎ澄ます。両手を下へ向けると、その掌が淡い青の光りを生み出した。

「闇よ、我の声を聞け。汝の力を我に与えたまえ。我が名はルーナ。我の名の下に、闇よ、力を示せ」

静かに、呪文を唱える。光りは輝きを増し、地に魔法陣を作り出す。それは光りの柱になり、部屋の天井にまで達した。

エイルは、魔の力が漂う城の長い廊下を歩いていた。

「エイル様！」

前方から走り寄ってきたのは、ウェーブのかかった長い赤髪の、女魔族。

「リリス……何」

エイルは面倒臭そうに前髪を掻き上げる。

「あの、エイル様の根城へ行っても良いですか？」

「何故」

「なぜって……あの……」

リリスは頬を染めながら、もじもじと自分の手を弄る。その様子を見てエイルは、ああ、と理解した。

「もう済ませたから来ないでいい」

「え……誰とですか！？ いつもは私とっ」

「何か勘違いしてねえか？ 俺が誰とやろうが、お前には関係ない」

縋るように服を掴んできたリリスの手を払い、エイルはそう切り捨てた。その時、エイルの足元を青い光りの円が囲み、強く輝き出す。

「エイル様！？」

「これは……だが、まさか……」

自分ではない者の術の発動。そしてそれが何の術であるか、エイルは知っていた。けれど、エイルは上級魔族の中でも、最強と言われる男。そのエイルを――。

「召喚……？」

その言葉を残し、エイルは魔界の城から姿を消した。

「何か見えるぞ！」

ルーナが作り出した光柱の中に現れた人影。それを見付けたレリスは声を上げた。

光りは、徐々にその高さを失って行く。ゆっくりと下がる光りの中、現れたのは、オレンジの髪。

「な……！」

一同は、驚愕に目を見開いた。

光りは、淡く輝く魔法陣を象るだけになっていた。その中に立っている魔族は、つい先程まで攻防を繰り返していた相手——エイルだ。

「あ。何だ、アンタが俺を呼んだのか」

その言葉をかけられたルーナは、ハツとしてぽかんと開けていた口を結ぶ。まさか、エイルが出てくるとは全くの予想外だった。

この男、間違いなく曲者。果たしてエイルと契約など果たせるのか、仲間を引き込めるのか、ルーナの自信が揺らぐ。

「……あなたと、契約したいの」

「さて、どうしようか」

エイルは、その美しい顔に、妖しい笑みを浮かべた。

6【契約】

言葉を失っていた、ルーナを除く一同。レリスは我に返り、ルーナに対し口を開く。

「そいつは危険だ！」

それを皮切りに、レイスも続く。

「ルーナさん！ 止める！」

今、違う次元に存在するエイルに、危険はない。仲間になってからも、身を滅ぼすことになる以上、危害をくわえてくることもない。だが、先程の傷を負わされた出来事がフラッシュバックし、嫌でもエイルを恐れてしまっていた。

ルカも、レイスを傷付けた魔族など受け入れたくもなかった。けれど、エイルの力は凄まじい。それを手に入れられるのならば、多少の我慢は必要か、と考えていた。

「レイス様、レリス様。あの男を引き込めば、魔族への脅威となるかもしれません」

「だが……！」

「ルーナの話では、奴がこちらに危害をくわえてくる可能性はないとのことです。ここは、ルーナに任せましょう」

そこまで言うと、レイスは口を噤み、レリスもぐっと押し黙った。ルーナは、契約に必要な儀を始める。

「あなたの名は？」

「エイル」

「エイル。私達の仲間になって。あなたの力を貸して欲しい」

ルーナは、エイルをじっと見つめる。エイルもまた見つめ返し、しばし考えているようだった。

そして、エイルはふっと笑みを零した。

「仲間になってやってもいいが……条件がある」

「承知の上よ」

エイルは流れるような視線で見遣り、ゆっくりとルーナを指差す。何の真似だろうか、ルーナは頭に疑問符を浮かべた。

「分からない？ アンタだよ」

「私？ が、何……？」

「アンタが贅になんな」

贅とは、犠牲になれということ。自分の命を取るのかと、ルーナは思った。

「私に死ねと言うの？」

「違う違う」

否定され、ルーナは困惑した。いったい、どうということなのか。

「抱かせな」

「……へ？」

聞き間違えたのか。ルーナはそう思い、素っ頓狂な声を漏らす。それを聞いたレイス達は、やはり止めようと一歩前へ出た。

「な、何を考えてるんだ貴様！」

レイスは眉間に皺を寄せ、声を荒げる。

当のルーナは、未だ幻聴でも聞いたのかと耳に手をあてていた。

「俺が仲間として共にいる間、アンタはその身体を俺に捧げる。それが条件だ」

幻聴ではなかった。ルーナは一気に顔を赤に染め、僅かに後退する。

「な、な、何を……！」

「嫌だつてんなら、この話しは無しだ。俺は帰るぜ」

「ま、待って！」

咄嗟に、ルーナはエイルを呼び止めていた。エイルはルーナを見下ろし、不敵な笑みを浮かべている。

拒否すれば、契約は破綻する。受け入れれば、自分が犠牲になれば、この世界は強大な力が、魔族に対抗するだけの力が手に入る。ルーナは、そう思考していた。

魔法陣の内側ギリギリまでに寄ったエイルは、ルーナの顔を覗き込む。ルーナは、唇を噛み締めていた。

「どうする？」

ルーナは、右手を左手できゅっと握る。そうして、決心を固めた。

「その条件……飲むわ」

「なっ、ルーナ！」

レリスは、ルーナの決断を聞くと、その背中に声をぶつけた。ルーナは肩越しに振り向き、四人を見渡す。

「良いのです。私一人が犠牲になれば、世界は救われるかもしれないのだから」

「ルーナさん……」

アルは、哀れみの目をルーナに向けた。レイスも、申し訳なく思い、うなだれている。ルカだけは表情を変えず、真っ直ぐルーナを見ていた。

「酷いな、犠牲だなんて。俺に抱かれないって女はゴマンといるんだぜ？」

「……とにかく、私は条件を飲む。契約、してくれるわね？」

「ああ、もちろん」

快諾したエイルを確認すると、ルーナは目を瞑り、す、と腕を横に風いだ。すると光りはその手に払われたように消え去り、エイルを閉じ込めていた空間も消えた。

「これからは、あなたは私達の仲間よ」

「よろしく、ルーナちゃん。あ、他の奴らもよろしくー」

エイルはルーナには微笑んだが、その後ろの四人には興味なさ気に挨拶をした。四人はそれぞれ不本意な思いを抱えながらも、渋々それを受け入れる。

エイルが、仲間となった。人間三人、天上人二人、魔族一人というめちゃくちゃなパーティーだが、今人間側が揃えられる戦力の最強と言っても良いだろう。

ルーナは、封印された力は未知数だが、伝説と謳われた戦士。高

等神聖術を扱えるルカとアル。レイスとレリスは、武力に秀でたルーン国のトップだ。エイルも、桁外れの魔力を持っている。これ以上のパーティーはない。

世界を魔族から守るための、礎が完成した。

「エイル、だったか。聞きたいことがある」

レイスは、恐る恐る、エイルとルーナのもとへ歩み寄る。

「何？」

「ルーナさんは、魔王には封印の力が働いているという。それは事実か？　そして、魔王は何故目覚めた？」

「魔王は、ルーナちゃんの術の名残で魔界の城から出られない。目覚めたわけは、魔族達が少しずつ魔王に力を与え、それを蓄えた魔王が自力で封印を解いた」

「自力で……何と恐ろしい」

エイルも桁外れだが、魔王は遥かその上を行くのだらうと、レイスは震える思いでいた。

「私も聞きたいことがあるの」

ルーナの声に、エイルはレイスから視線を移動させる。

「魔王を封印した時のこと。あなた、いなかった……よね？　あなた程の魔族なら、最前線にいるはずなのに」

「俺は興味の無いことには参加しない口なんですね。人間界にある根城にいたよ」

「いったいどこまで気まぐれ、いや、自由奔放なのだろうか。ルーナは、エイルと上手く付き合っているのかと不安を覚えた。」

7【魔族との契り】前編

玉座の部屋を後にし、全員は別の部屋に移動した。そこには長いテーブルが置いてあり、豪華な料理が用意されている。

「少し早いが、夕の食事にしよう」

レイスの言葉を合図に、レリス、ルカ、アルは席につく。ルーナは所在なげに立ち尽くしていた。

「ルーナさんも、座って」

レイスは優しく笑いかけ、それを見たルーナは頷き、椅子に腰を下ろす。エイルはその様子を見ながら、壁に寄り掛かって立っていた。

「魔族は食事をするのか？」

「いや。食べられるけどな。俺は飯より風呂に入りたい」

「ルーナさんの部屋は風呂もついている。後で案内しよう」

いつの間にか、エイルとルーナは同室ということになっており、ルーナは困り果て顔を真っ赤にしながらも、あの条件を飲んでしまったことから文句をつけることは出来なかった。

「では……恵みに感謝して、いただきます」

「いただきます」

それぞれ料理をつつき、舌鼓を打った。ルーナは久々の食事に、顔を綻ばせた。

「何だと！」

黒く澱んだ世界に、魔王の怒りが轟く。長い髪を振り乱し、魔王は知らせを持ってきた魔族の男の胸倉を掴んだ。男の表情は、黒い

前髪に隠れて見えない。

「エイルがあの子に召喚されただろ!?」

「は、はい……っ」

「くそっ、忌ま忌ましい娘め!」

掴んでいた胸倉を投げるように離し、魔王は長い爪をぎりつと噛む。自分のお気に入りであるエイルが、ルーナの手の内にあることが我慢ならなかった。

「ジェイラス! 部下を引き連れてエイルを奪還せよ! 人間共は殺せ!」

「は!」

命を受けた男、ジェイラスは頭を垂れると姿を消した。

魔王は闇の物質で造られたごつごつとした玉座に腰を落とす。スリットから足を剥き出しにし、組むと、再び爪をかじる。

「許さんぞ、小娘……」

怒りで震えながら、恨みをこめてルーナの顔を脳裏に浮かべた。

ルーナ達は食事を追え、それぞれの部屋に移っていた。

ルーナに与えられた部屋は、まるで王女が住んでいるかのような豪華で可愛いものである。ルーナは、天蓋付きベッド、机、刺繍の施されたカーテンや、部屋の装飾を見ながら、自分には分不相応思っていた。

ふと、一つのドアを見遣る。その先では、エイルが湯浴みしている。

すぐ事に及ぶのだろうか、ルーナは不安げに、ベッドに座った。ベッドには、エイルの脱いだコートが置かれている。

緊張した面持ちで、暫く身体を硬くしていたルーナだったが、風

呂に通ずるドアががちやりと開き、びくつと肩を跳ねさせた。

エイルはタオルで髪を拭きながら、ズボンだけを身につけ浴室から出てきた。雫がばたばたと滴り、裸の胸を滑り落ちる。それを見たルーナは、慌てて目を逸らした。

「ん？」

ルーナの異変に気付いたエイル。顔を真っ赤にしている彼女の横顔を見て、ニヤリと笑う。

「どうかした？」

「べ、別に」

エイルはルーナへと近付き、拭いていたタオルをベッドへ投げた。それはルーナの隣に落ちて、再び、ルーナはびくりと身体を揺らした。

ルーナの横、片膝だけベッドに乗り上げる。エイルとルーナは至近距離で顔を見合わせた。

「なっ、何！？」

「そりゃこっちの台詞。何緊張してんの？」

「離れてよ！」

ルーナは咄嗟にエイルの胸を押した。そしてその生肌の感触に目を剥いた。

「いやー！」

「アンタが触ったんだろ……」

エイルは呆れて、両手で顔を隠すルーナを見遣る。ルーナの腕を掴み顔から剥がすと、につこり笑った。

「今日はキスだけね」

「へっ。え、あの……」

エイルは目を伏せルーナの唇を見つめながら、ゆっくり顔を近付ける。もう少しで触れ合うという時、ルーナはぐりんと顔を背けた。

「……おい」

「キ、キスは契約外よ！」

「キス無しでやるだけやるって？ 凄いこと言うな」

「違うー!」

「うーん……?」

ルーナのあまりの取り乱しぶりに、エイルは不思議に思う。もしや、と思い、一つの疑問を口にした。

「もしかして、生娘か?」

「きむす……!」

真っ赤な顔で口をぱくぱくさせるルーナ。その反応で、エイルはルーナが初めてであると悟った。

「ふーん。なるほどねえ」

エイルは口角を吊り上げ、ルーナを見つめる。顎を指で掴むと、強引に口づけた。

「んん!」

エイルは重ねた唇の隙間から舌を差し込もうとするが、ルーナは歯を噛み締めているため、それを阻まれる。歯列をなぞってみるが、それが開かれる兆しはない。仕方なく、唇を離れた。

「はあっ、何するのよお!」

ルーナは半泣きでエイルを睨み付ける。もう裸だとか気にしてられない状況で、エイルの肩を押しやった。だが、いくら力を入れてもびくもしない。

「今日はシねえつもりだったが……気が変わった」

エイルはそう言うと、ルーナの腕を取りベッドへと押し倒した。

「きゃあ!」

「処女は一回しか経験ねえけど、優しくしてやるよ。今回だけな」

ルーナの外套の装飾具をぶちりと外し、取り払う。豊かな胸を手で包むと、ルーナは抵抗を始めた。

「いや! 待って!」

「嫌? それは契約と違うんじゃないの?」

「う……」

そう、エイルとの契約の条件は、自分の身体を捧げること。それを自ら破るわけにはいかない。世界の命運がかかっているのだから。

ルーナは観念したように、きつく瞼を閉じた。

8【魔族との契り】後編

無言のOKと取ったエイルは、ルーナの桃色の唇に口づける。しかし、やはりそこは閉じていて、舌の侵入を拒んでいる。

唇を重ねたまま、ルーナの衣服を剥ぎ取っていった。

「んっ、や!」

胸が露になった時、ルーナは顔を横に逃がし、膨らみを隠すように己を抱く。誰にも見られたことのない身体を晒すことが、死ぬ程恥ずかしかった。

そんなルーナの心情など気にせず、エイルはルーナの腕を掴み、頭上でひとまとめに押さえ付けた。

「やだあつ、離して……いやっ」

「俺を拒否していいの? まあ、その嫌がる顔もイイけどね」

エイルは、どんなに嫌がられようが止めるつもりはない。逆に加虐心を煽られ、泣かせたいとさえ思った。

膨らみの頂きにある果実を摘むと、ルーナは閉じていた目を見開く。くりくりと弄ってやると、甘い声が漏れ出す。

「んあつ、や……はあん」

自分のものとは思えぬ声に驚いたルーナだったが、エイルの与える巧みな刺激に我慢することが出来ない。

エイルは胸の頂に吸い付き、舌で転がし、軽く歯を立てる。するとルーナの身体はしなり、嬌声が上がった。

「感度いいな。もしかして、一人でやったことがあるのか?」

「な、にを……」

「自慰だよ」

「そんなことっ、したことない……!」

「それでこの感度か。厭らしい身体だな」

耳元で囁くように言われ、ルーナは羞恥に涙を滲ませる。それを

見たエイルは、ククク、と喉で笑う。

「イイね、泣き顔。そそられる」

すつ、と指を脇腹に滑らせ、そのまま下降していく。薄い茂みに到達すると、ルーナの身体が跳ねた。

「やつ、そこ、駄目！」

抵抗しようとするも、腕は拘束されている。ルーナは足を堅く閉じたが、隙間から指が入り込み、敏感な肉芽を突かれた。

「いやあ！ あっ！」

エイルはその突起を優しく擦り、ルーナの感じて真っ赤になっている顔を見下ろす。その視線に気付いたルーナは顔を背けるが、恥ずかしさは消えない。

快感から足の力が緩み、開いた瞬間を見逃さず、エイルはその間に己の足を挟む。これでもう閉じることが出来ない。ガードが無くなった秘部に触れ、割れ目をなぞると、そこは湿っていた。

「濡れてら。嫌がつてるわりにはしっかり感じてんじゃねえか」

「ふつ、う、ふえ……」

ぼろぼろと涙を流し泣き出したルーナを見ても、エイルは妖しく笑ったまま。

「泣いたら止めてもらえと思ってんの？ 逆効果だぜ」

言い終わると同時、指を一本、ぬるりと挿入した。

「あ！ やあっ！」

くちゆくちゅと慣らすように掻き回し、中をほぐしていく。ルーナはその異物感に恐怖を覚えた。

「お願い……っ、やめてえ」

必死に、涙を零しながら哀願する。だが、エイルはそれを無視して、指を二本に増やした。

「やああっ」

「慣らさなきや無理だろ。我慢しな」

人差し指と中指で中を擦り、親指で肉芽を刺激する。二つ同時の愛撫から、ルーナは腰を浮かして逃げようとした。だがそれは無意

味なこと。エイルは指を抜き刺して、ルーナを追い立てた。

そして、もう一本増やそうとしてみるが、ルーナに苦痛の表情が浮かんだ。

「二本が限界？ そんなんで大丈夫かよ」

中は柔らかく、指に絡まるように蠢いているが、入口はきつく締め付けている。広げるように指を回してみるが、これ以上は無理のようだった。

「こりゃあ痛そうだな。仕方ねえか」

言つと指を引き抜き、腕の拘束を解いて、ルーナの両膝を掴む。それを開くと、その隙間に身体を入れる。

「や！ いや！」

更に左右に大きく開かれ、ルーナ自身も見ただことのない部分がエイルの眼前に晒された。ルーナの羞恥心は最高潮に達し、大きな目からとめどなく涙が溢れている。

エイルはズボンの釦を外し、硬く反り勃った熱を取り出した。それをルーナの小さい蜜口にあてがう。

「あ！？ やだっ、やだ！」

「イイ声で鳴きな」

ぐつと腰を進ませ、熱い杭を挿入していく。

「あああ！ いつ、痛いつ」

苦痛に歪むその表情もエイルを煽るだけだが、なるべく痛くないように、エイルはゆっくりと自身を沈める。それでもルーナは、裂かれるような痛みを感じていた。小柄なルーナにとって、エイルの質量は大き過ぎた。

身体を硬くするルーナに優しく口づけると、心なしか力が緩む。

その僅かな隙に、エイルは熱を埋めていく。

「んんっ……い、あつ！」

思わず声を上げて唇が開いた瞬間、エイルは舌を滑り込ませた。上顎を擦り、逃げる舌を追いかけて、絡め取る。ねっとりとした口内の愛撫に、ルーナの身体から力が抜けた。

エイルはぐつと腰を進ませ、熱い杭を根もとまで押し入れる。

「ああ！ やっ、はっ」

キスから逃げるように頭を振るルーナの顎を捉え、再び深く口づけた。執拗に舌を味わいながら、ゆっくりと腰を動かす。エイル自身はきゅうきゅうと締め付けられ、その眉間に苦しげに皺を寄せた。

「やっぱ狭いな」

「痛っ、やだ！ あっ、ふっ」

「でも、中濡れてるぜ」

奥を突くと、じんわり蜜が溢れ出て、杭は潤滑されぬるぬるとした感触になった。

ルーナはエイルが動く度、痛みとは別の甘い疼きが生まれていることに気付く。

突き上げられ、ぴりぴりと入口は痛むが、奥から込み上げてくる快感がルーナを支配する。

「あん！ ああっ」

最初は気遣いゆっくりとした動作であったが、エイルはルーナの変化を見落とさず、激しい律動を開始した。肉襞を擦り上げ、指では肉芽を刺激する。

ルーナは痛みと快感が混ざり合い、何が何だか分からない状態で、縫るものを求めてシーツを握り締めた。その時――。大きな魔の力が近付いていることを、ルーナとエイルは感じとった。

9【迫り来る闇】

一つではない、強い魔力が城に迫っている。

「エ、イル……！」

「上級魔族が確実にいるねえ、こりゃ。でもまだ大丈夫だよ」

「何が……あつ！」

城にはまだ到達しない。そう感じたエイルは、ルーナの奥を突き、行為を再開した。しかしルーナはそんな場合じゃないとばかりに脇腹横にあるエイルの膝を押し、抵抗を始める。

「ば、か！ 魔族が……っああ！」

それでもエイルは律動を止めず、一層激しく腰を動かした。

「安心しな。すぐ終わらせてやるから」

「やああ！ んあつ」

熱い塊が内部を擦り上げる。痛みと共に訪れるその未知の感覚は快感で、危険シグナルの発令されているこの状況でも、ルーナの思考回路は麻痺した。

エイルは奥の壁をも破ろうかという程に突き上げ、絡みつく内部に吸い取られるように欲望を吐き出す。何度か腰を打ち付けて、全てを中へ放った。

「あ……あ……っ」

ルーナは最後の激しさに涙を滲ませ、小刻みに震えた。ずるりと熱が抜けていく感覚にも、びくりとする。

「ごちそうさま」

ちゅっと口づけを落とし、エイルはルーナの頭を撫でる。すぐにベッドから下りると、ズボンの釦を留め、素肌の上に腕を通さずコートを羽織った。

「待って……私、も……」

荒い呼吸をしながらルーナは上体を起こす。が、自分の身体に異

変が起きていることに気付く。

「腰が……」

「抜けた？ いいから休んでな」

エイルの言うように、完全に腰が立たなくなっていた。立つことも勿論不可能だ。

エイルは一人、部屋から出て行こうとする。その背中に、ルーナは不安げに声をかけた。

「エイル！」

名を呼ばれ、顔だけ振り向く。

「俺に任せておきな」

親指を立てて見せ、エイルはドアを開けて外に消えていった。

「魔族の姉ちゃん！」

アルはエイルを見付けると、柵として作られた石柱の向こう、空に浮かぶ無数の魔族の群を指差す。しかしエイルはそんなことより、アルの言つてのけた台詞に青筋を立て、蹴り飛ばした。

「誰が姉ちゃんだデメエ」

「兄ちゃんでした……」

緊張感のないエイルとアルのもとに、レイス、レリス、ルカが集まってくる。レリスは、ルーナの姿が見えないことに疑問を持った。「ルーナはどうした？」

「あん？ 部屋にいるよ。どうも腰が抜けたみたいで。激しくし過ぎたかな」

「なっ！ お前……！」

カッとなったレリスは、エイルのコートの襟を握る。その反応に、エイルはニヤリと笑った。

「どうした？ これは契約の時に決まっていたことだ。アンタに何

の文句がある。もしかして惚れちゃったのか？」

「ち、違う！ 俺は……！」

「よせ！ 今は仲間うちで言い合っている場合ではない！」

レイスが二人を制止した。エイルは、やれやれと空を見遣る。

「あらら。こんなにいるのか。やだねえ」

飄々と感想を述べながら、身体ごと魔族の群に向き直った。

まるでエイルを待っていたかのように、魔の軍勢は前進を始める。一人の男が最前列に踊り出ると、エイルに向かって声を上げた。

「エイル様！ あなたを迎えに来ました！ こちらに来て頂きたい！」

「ジェイラスか……。それは無理だ！ 俺は召喚術による契約をしている！」

「何だつて……？ 召喚されただけではなく……契約を交わしてしまったのですか！？」

エイルは頷き、ジェイラスは頭を抱えた。今、エイルは人間の手の内。契約が成されている以上、エイルが人間を裏切ることとは出来ない。

魔王の命令であるエイルの奪還は、現状不可能だ。こうなれば、もう一つの命令だけを遂行するしかない。

「おのれ人間共め！ 貴様らだけでも始末してやる！」

ジェイラスは腕を上げ、それを振り下ろした。すると魔族の群は更に迫り、次々に術の発動態勢に入る。

「おい、王様。アンタ念のためバリア張りな。俺はその中に入れるなよ」

「あ、ああ。集まれ兵達！」

レイスはバリアを張り、魔族の出現によつて、それに怯みながらも挑もうとしていた兵士達もその中に。兵士は口々に、エイルは誰なのかと騒然としている。

「自己紹介も兼ねて、実力を披露しますかねえ。でも、全力出すのは疲れるから……」

エイルが振りかぶると、その掌に赤い光りが集約されていく。エイルの膨れ上がる魔力に気付いたジェイラスは、目を疑うとともに焦りの声を上げる。

「引け！ 逃げる！ エイル様、何故……！」

信じられない光景を見る前に、ジェイラスは部下を置いて姿を消した。残された魔族達は、夜の空で、突然消えた上官に、どうしたんだと困惑している。統率者を失った軍勢に向かい、エイルは言葉を放った。

「十分の一で片付けてやらあ！」

集まった赤い光りが、目も眩む輝きを生み出す。エイルはそれを、魔族の群に思い切り投げ付けた。

「何だ……うわあああ！」

光りは、群の中で爆発する。けたたましい轟音を響かせた攻撃、それは魔族全てを飲み込んだ。

もうもうと煙りが立ち込め、その幕が消え去ると、数え切れない程だった魔族の姿は消えていた。

「おおお！」

兵士達から、歓声が上がる。危険は無くなったと判断したレイスはバリアを解き、そこから溢れ出るように走り出した兵士達は、エイルを囲む。

「凄いなお前！」

「よくあれだけの魔族を退治出来たもんだ！」

その称賛の声に、エイルはやれやれと髪を掻き上げた。

魔族の襲撃から一夜明けた朝。陽の光りが差し込む窓際のベッドの上、ルーナは寝返りをうつ。

ふ、と瞼を開けると、そこには眠るエイルの顔があった。

「きゃあああ！」

「んー……？」

ルーナの悲鳴によりエイルも目を覚まし、起き上がると腕を天井に、身体を伸ばす。

「ルーナちゃん、朝から煩い」

「何で一緒に寝てるのよ！」

「ベッドが一つしかないから」

もつともな答えに、ルーナは押し黙る。男と共に寝るなど免疫のないルーナは真っ赤だ。

「何を今更照れてんの？ 昨日俺に抱かれたくせに」

「だっ、かれ……！ それは、契約で……っ」

昨夜のことを思い出してしまい、ルーナはしどろもどろになる。

恥ずかしさからシーツを頭から被り、隠れた。だがそこに点々と残る赤い処女を失った証を見付け、ルーナの羞恥は増す一方。

ガバツとシーツから逃げ出たが、今度はまたエイルの姿が目飛び込んで、ルーナは悲鳴を上げながら枕に突っ伏した。

「……何やってんの？」

「もおいやー！」

ルーナが八方塞がりで半泣きになった時、コンコンとドアがノックされた。

「はっ、はい！」

驚いてルーナは起き上がる。ドアの外から、兵士であろうか、男の声が聞こえた。

「レイス様がお呼びです。エイル様に伺いたいことがあるそうです」
エイルは予想外のことに驚きルーナを見遣る。ルーナは、首を傾げていた。

眩しい陽光が照らす城の廊下を、エイルとルーナは歩いている。
二人は、玉座の部屋へと向かっていた。一つの扉の前で、二人は立ち止まる。ルーナはそれをノックし、返事を待たずしてエイルは開け放つ。

「ちょ、ちよっと!」

「よう、王様」

ひらひらと手を振りながら、エイルはさっさと入室した。ルーナは渋々それに続く。

「おはよう、二人とも。呼び出してすまないな」

王の職務である国の情勢を記した報告書に目を通しつつ、レイスは笑顔を向ける。その隣にはルカが控えていた。

「俺に聞きたいことがあるんだろ? 何?」

書類を傍らに置き、レイスはエイルに視線を向ける。

「魔族が住む世界への行き方についてだ」

「なるほど。敵地へ乗り込もうってわけか」

「レリスが剣技の稽古中なのだ。アルもそれについて行っている。

二人が戻り次第話を聞きたい」

「分かった。んじゃ、待ちますか」

エイルはルーナの肩を抱き壁側へ行くと、そこに背を凭れかけた。ルーナはエイルの腕の中で、頬を赤らめ固まっている。

程なくして、レリスとアルは現れた。レリスは稽古のせいか、じわりと汗をかいている。

「父さん、話って?」

「これからエイルに聞こうと思っている」

エイルをちらりと見遣り、その腕にルーナが抱かれていることに、レリスはムツとする。

「こんなところでくつつくな!」

「露骨だねえ、王子様」

相手をするのは面倒だ、と、エイルは仕方なくルーナを放した。

ルーナはそのままレリスに駆け寄る。

「な、何だ?」

「剣の稽古をされていると聞いて……。不躰ですか、譲って頂ける剣はないでしょうか」

「ああ、後で渡そう」

「ありがとうございます」

ルーナはニコリと笑いレリスを見上げると、レリスはほのかに頬を染めた。

「あーあ。青春だねえ」

エイルはつまらなさそうに一人ごちる。そんなエイルに、レリスはまた不機嫌な表情を浮かべた。

「それで、エイル。先程の話だが」

「ごほんと咳ばらいをし、レイスは立ち上がる。皆のいるところまで段差を下り、エイルを見つめた。」

「魔界への行き方、だろ?」

「そうだ」

「魔界!?!」

レリスは驚きを隠せず、目を見開く。アルはきょとんとし、ルカは腕を組み目を伏せている。ルーナは、レイスと同じくエイルを見ていた。

「魔界は、人間界とは別次元にある。簡単なことだ、次元を超えりゃいい。だが、アンタらにそれは不可能だな」

「……お前は超えられるだろう。俺達を連れて行くことは出来ないのか?」

両手を左右に、お手上げだとするエイルに対して、ルカは一つの

可能性を上げる。

「この人数を連れて跳べって？ 無理無理。誰か一人でも厳しいだろうよ」

「それでは……魔界へ挑むことは、不可能……」

考えていた道が絶たれ、レイスは悔しそうに呟いた。その時、レリスはあることを思い出す。

「北の大地に現れた空間の歪み！ それが魔族と関係しているなら、魔界へと繋がっているかも……」

「あれは魔王が目覚めた時、その力の波動が次元を超え、魔界と人間界との狭間に歪みが生まれたんだ」

「それでは……！」

エイルの説明では、魔界へと繋がる道である可能性は高い。

「もしかしたら、そこから魔界へ行けるかもな」

エイルの言葉に、レイスは、こくりと頷く。魔王が力を完全に取り戻してはいない、魔界から動けないでいる今、なるべく早くこちらから攻撃をしかけるのが得策。レイスは、決意する。

「北へ、向かおう」

それに頷いたのは、ルーナだけ。レリスやルカは、レイスを止めにかかった。

「レイス様は国を守る職務があります。ここを離れてはなりません」

「そうですよ父さん！ 父さんに何かあつたら……！」

「世界を守ることは結果的にルーナ国をも守ることになる。代わりに腹心達に働いてもらうことになるが、私は行くぞ」

レイスの意思は固かった。だが、部屋の奥に控えていた、レイスの言う腹心達、王の補佐官達が、首を縦に振らなかった。

「なりませんぞ、レイス様」

「そうです。そのような得体の知れない、レイス様を護れる器かどうかも分からない男と小娘について行くなど」

補佐官の一人が、エイルとルーナを睨み付ける。エイルはそれを知らん顔で受け流し、ルーナはその迫力に臆し一歩後退した。

「ルーナさんは伝説の戦士だ！ それに、この男の強さは兵達から聞いたであろう！」

「この目で見ていないものは信用出来ませぬ」

何を言おうが認めないという補佐官の雰囲気、レイスは言葉を詰まらせる。

ルーナは、自分が受け入れてもらえないことに、俯き、スカートを握りしめた。レイスは、そんなルーナの心の動揺を消すようなことを口にする。

「では、二人には武闘会に出てもらおう」

「ほう、それは」

「名案ですな」

突如出てきた武闘会の言葉。ルーナは混乱気味に問い掛ける。

「あの、武闘会とは……」

レイスはルーナに向き直り、ぽん、と肩に手を置いた。

「十日後、我が国で武闘会が開かれることになっている。各国から強者が集まり、誰が一番強いのかを決める大会だ。あなたとエイルはそれに出場し、力を見せ付けてくれ」

「ええ！？」

「めんどくせえ……」

ルーナはいきなりの大会出場要請に声を裏返し、エイルはうんざりとした表情で頭に手をやった。

「その者達が優勝したなら、レイス様の同行を認めます」

補佐官達は異論はないと頷き、かくして、エイルとルーナの武闘会出場が決まった――。

11【エントリー】

「ルーナ、ちょっといいか」

「レリス王子」

エイルとルーナが武闘会へ出場するという話が終わり、一同は解散。去ろうとするルーナをレリスは引き止める。

「いい剣があるんだ」

「あ……」

すっかり忘れていた、剣を譲って欲しいと頼んでいたことをルーナは思い出す。レリスはルーナを連れ、稽古場へ向かった。

「これだよ」

レリスが手渡してきたのは、青い宝石が銀の柄の部分に埋め込まれた細身の剣。細工も細やかで、秀逸であろうその剣に、ルーナは目を奪われた。

「オリハルコンの剣だ」

「オリハルコン！？」

オリハルコンとは、金属の中でも抜きん出て高価、且、耐久性に優れた物質。宙に浮くという性質もあり、その剣はとても軽かった。

「こんな凄いものを……」

「是非使ってくれ」

「ありがとうございます……でも、良いのでしょうか」

「その剣は、伝説の戦士に相応しい。そうだ、剣を装備するホルダーもいるな」

そう言うレリスは武器庫から上質な革製のホルダーを持ち出してきた。それを受け取ったルーナは、さっそく身につけてみる。

「ああ、やはりその剣は君にピッタリだ」

「何から何まで、ありがとうございます」

深々と、ルーナは頭を下げた。

「やめてくれ。君の戦力を増幅させるためなら、どんな尽力も厭わない」

「それでもやっぱり……ありがとうございます」

自分を認め、ここまでしてくれるレリスに、ルーナは涙を滲ませる。それを見たレリスは慌てながらも、ルーナの涙を指で掬う。引き込まれるように抱きしめようとした、その時

「何やってんの？」

エイルが、稽古場の入口に寄り掛かっていた。

「ル、ルーナに約束の剣を渡していただけた！」

「ふうん。下心がありそうだけどね」

ニヤニヤと笑うエイル。ルーナを抱いたくせにこの魔族は、その事実がなかったかのように振る舞う。ルーナは胸がちくんと痛み、その感情に疑問を抱いた。

「とにかく、オリハルコン・キリク……その剣の名だが、それはルーナのものだ。好きなように使ってくれ」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げると、ルーナはエイルのもとへ駆けて行く。ルーナは自分の剣を嬉しそうにエイルに見せている。そうして二人は、稽古場から去って行く。レリスは、そんなルーナを寂しげに見送った。

「大変なことになっちゃったね」

自室へ戻ろうと廊下を歩きながら、ルーナはぼつりと言葉を零す。

「武闘会？ 面倒だよなあ…… 何で俺が」

ぶつぶつと文句を垂れて、エイルはルーナの腰に腕を回す。歩き

ながら抱き寄せ、ルーナの頭にキスを落とした。ルーナはそんなことにも真っ赤になり、速まる胸の鼓動を不思議に思う。

「エイルって、くつつき魔？」

どきまぎしながら、そんなことを言っでごまかしている。

「別にー。可愛い子が好きなだけ」

ルーナを好きだと言ったわけではないのに、その言葉にルーナは胸苦しさを感じる。それが何なのか分からないまま、武闘会の日を迎えた。

晴天に恵まれた武闘会当日。エイルとルーナはルカとアルに案内され、ルーン国城に隣接する闘技場にいた。

レイスは上座の設けられた、闘技場を上から見渡せるところにいる。レリスも、その隣に腰を落着かせていた。

ルカは、エントリー場へエイルとルーナを導く。

「男女別に分かれているのね」

ルーナは女性の欄に名前を書き、番号のふられた札を貰う。エイルも名前を綴ろうとした時、受付をしている人間に止められた。

「申し訳ありません。男性の部は定員になりました」

「定員？ それじゃ仕方ねえな。俺は不参加ってことで」

「待て。お前は参加するんだ」

面倒なことを避けられると呑気に両腕を頭の後ろに回したエイルに、ルカはそれは許さんとはかりに口を出す。

「参加出来ねえだろ。定員オーバーなんだから」

「女の部にエントリーしろ」

ルカのその言葉に、しばし沈黙が訪れた。

「……は？」

「女の部はまだ定員に満たない。女に化けて出場しろ」

涼しい顔をして、ルカはさらっとそんなことを言う。

「何で俺が女装しなきゃならねんだ！」

「補佐官達に力を示さねばならんだろう。それに、出場はレイス様の願いだ」

「エイル、仕方ないよ。出よう？」

契約者のルーナの言葉には、エイルは逆らい難い。だが男としてのプライドが、女装するということを拒絶する。

「ほらほら、こんな服もあるし」

ルーナは突然、どこから持ち出してきたのか、立て襟と胸元に金の刺繍があり、深いスリットの入ったタイトの赤いドレスをエイルに見せた。

「何それ」

「私の部屋にあったの。エイルに似合うよ！ これ来てエントリースよう！」

「ふざけんな！ こんなもん着れるか！ 馬鹿かデメエ！」

「きやー！」

怒鳴られて縮こまるルーナ。ル力はそのやり取りを呆れ顔で見ている。

「とにかく、出てもらわなくては困る。というか出る」

「うん、出る」

ル力の真似をして、ルーナはエイルをじっと見つめる。出るというのは命令だ。エイルは、頷くしかなかった。

「ちくしょう。何で俺が女装なんか……。貸せ！ 着替えてやらあ！」

エイルはルーナの持っていたドレスを引ったくり、足音を荒く立てて去って行く。それを、ルーナは楽しそうに見ていた。

暫くして、エイルは戻ってきた。そのドレスを着た姿は、並の女

では敵わない程に美しく、化粧を施さなくともハッキリとした麗しい顔立ちで、その場にいた誰もが振り向く。しかし、下には黒いタイツを穿いており、生足が見れないことに心底ガツカリしている男達だが、残念ながらエイルは男である。

ルーナとルカも、啞然とエイルを見ていた。

「これで文句ねえだろ」

外見がいかに美しくとも、口の悪さはそのままのようだ。

エイルは女性の部の欄に記入を済ませると、ルーナの腕を引っ張り、顔を近付けて凄む。

「俺をこんな目に合わせやがって。今夜はとことん虐めて泣かせてやるからな」

「え……」

ルーナは、さあっと血の気が引くのを感じた。

12【武闘会開幕】

彩りのない花火が鳴り響く会場。それは武闘会開幕の狼煙だ。それを見上げながら、ルーナは腰に下げた剣を握り、久々に闘うことに不安を覚えていた。そんなルーナに、隣にいたエイルは声をかける。

「表情が硬いぜ」

「う、うん」

ずらりと並ぶ参戦者達の中、ルーナは落ち着きなく辺りを見回していた。男のようにがっしりとした身体つきの女と目が合い、ざろりと睨まれ、ルーナは焦って顔を背ける。みんな強そうだ、と感想を抱いた。

中央にある闘技場に、一人の男が現れる。その男は審判を勤める者である。男は、声高らかにルールの説明をし始めた。

「武闘会では、対戦相手を殺めることは禁止です！ また、術の使用も禁じます！ 時間は無制限であり、審判が勝負有りと判断するまで闘っていただきます！」

それを聞いたエイルは、露骨に嫌そうな顔をする。

「俺、体術苦手なんだけど……」

「剣術は？」

「からつきし」

「大丈夫なの？」

「人間には勝てるだろ……多分」

こそこそと言葉を交わしていると、審判が武闘会スタートを宣言した。番号の少ない札を持った者達から、闘技場へ上がる。男女交互に、それぞれが体術、剣術を駆使し、勝利を目指した。勝者は勝者に対戦するべく、待機する。敗者は、観戦席へと回った。

「みんな中々ね」

「そうか？」

強者達の闘いを見て、ルーナは呟く。エイルはそれに気のない返事をした。

そしてついに、ルーナの順番が回ってきた。番号を呼ばれ、ルーナはごくりと喉を鳴らす。

「私とエイルが優勝、準優勝を取れば良いのよね」

「ま、頑張んな」

不安と緊張、そしてプレッシャーを隠しきれないルーナだが、エイルは心配していなかった。ルーナは、伝説と謳われた戦士だ。術が使えなくとも、剣を求めたことから、その技術にも長けているのだらうと、エイルは考えていた。

ルーナは、ゆっくりと闘技場への数段の階段を上る。待ち構えていた相手は、ルーナを睨んだ、体格の良い大きな女だった。

「あんたみたいな小娘、数秒で片付けてやるよ」

「……よろしくお願いします」

ルーナは一礼し、剣の柄を握ると、それをすらりと抜く。相手は武器を持っておらず、体術を使うようだ。

審判が、試合の開始を宣言する。と、同時、女は、猛然とルーナに襲い掛かってきた。

顔面に目掛けて拳が飛ぶ。ルーナはそれを交わし、素早く相手の背後に回った。女はそれを読んでいたらしく、後ろ蹴りをルーナにくらわせようとする。ルーナは蹲って避け、女の軸足に足払いをかけた。

「うあ！」

女はバランスを崩し、倒れ込む。女はすぐさま起き上がるようにしたが、眼前にルーナの剣の切っ先が向けられていた。

あつという間の出来事に、審判は呆然と立ち尽くしているが、

「私の勝ちです」

ルーナの、その言葉に我に返ると、勝者はルーナであると声を上げた。

自分の敗北が信じられない女は、茫然自失になっていた。試合終了後の礼をする時でも女の表情はどこを見ているのか分からない目をして、口を微かに開けて心ここにあらずだった。

ルーナは立ち尽くす女に背を向け闘技場を下り、ホツと胸を撫で下ろす。エイルはそんなルーナの頭に手を乗せ、ぐりぐりと撫でた。そしてそのまま、闘技場へ向かう。ルーナの次の番号は、エイルが持っていた。

審判が番号を呼び、両者が向き合う。エイルの相手は、赤茶色の髪を頭上で結わいて垂らした女。武器は、ナイフのようだ。礼をして、女は構える。エイルは真つすぐ立ったままだ。

女はエイルの出方を見ているようだったが、全く動く気配のない様に痺れを切らし、地を蹴った。ナイフを構えて、エイル目掛けて突進していく。ナイフをエイルの腕に突き立てようとした時、エイルの姿が消えた。瞬間的に女の真横に現れ、首の後ろに手刀を叩き込む。女はぐらりと身体を傾け、倒れた。

審判が駆け寄り、女の様子を確認する。女は失神し、ぴくりとも動かない。審判は、エイルの勝利を宣言した。

エイルはルーナのもとへ行くと、

「楽勝」

と笑い親指を立てる。しかしルーナは複雑だった。確かに二人は勝利を重ねて行かなければならないが、このままいけばエイルとルーナが相対する可能性は高い。しかし自分は負けるかもしれない、そう思っていたルーナだったが、次々と相手を下していった。またエイルも、人間には勝てるとの言葉通り、体術が苦手ながらも勝利を重ねた。

そしてついに、勝ち続けたのはルーナとエイルだけになった。ルーナはどうしようといったふうにエイルを見遣る。

「もう条件は満たしたも同然だ。どっちが勝とうが関係ねえだろ」
「そ、そうじゃなくて」

ルーナは、エイルと闘うのは嫌だった。魔族といえど、今は仲間

それに、初めて抱かれた相手なのだから。そこまで考えて、ルーナは顔を真っ赤にする。それをエイルは不思議そうに見ていた。

二人が闘うことは、もう仕方がない。ルーナは覚悟を決めるしかなかった。邪念を消すようにルーナは顔を左右に振り、闘技場を見据えた。

審判が、二人の番号を読み上げる。ルーナとエイルは二手に別れ、別々の階段から闘技場へ上った。ルーナは、剣の柄に手をかけてから、礼をする。頭を上げる時には、闘うことだけに集中する決意を固めていた。ここまできたら、相手が誰であろうが全力を出す、と。

13【交戦する二人】

ルーナの目が変わった。今まで惑乱していたものが、意志を真つすぐと持った眼差しである。その変化に気付いたエイルは、ふっと笑う。

エイルは、人差し指をくいくいと曲げ伸ばしし、かかってこいといったふう挑発した。それに乗ったルーナは勢いよく駆け出し、エイルへと剣を振りかぶる。それに意識を奪われたエイルの顔を目掛け、蹴りを飛ばす。剣撃は当たらなかった。だが、その足をエイルは腕でガードし、ルーナの攻撃は当たらなかった。

ルーナは瞬時に飛びのき、剣を正面に構える。

「体術も得意なわけだ。俺は苦手だが、さつきも言ったが人間には負けないよ」

言い終わるとともに、エイルは地を一蹴りする。その一歩だけでルーナへと接近し、ルーナの剣を握る手に蹴りを入れる。その衝撃で、剣はルーナの手を離れ、闘技場の隅にまで飛んでいった。

「くっ！」

剣を失っても、ルーナの闘争心は消えない。拳を何発も繰り出し、前へ前へと攻めていく。だが、エイルはそれを全て避けていた。

蹴りを飛ばしてみるも、エイルに当たらない。ルーナは、自身の身体の重さを感じていた。体術さえも、封印術の名残によって衰えている。思うように、身体が動かなかった。

人間としては充分強いが、その存在が伝説として残るほどの力はないと、エイルは感じていた。自分を召喚したことといい、ルーナの力は弱くなっているのではないか、魔王も、封印は完全には解けず、魔界から動けないでいることから、ルーナにも封印の力が未だに働いているのではないかと、エイルは推測した。

「そんなんじゃ、俺には勝てねえよ」

言つと、エイルは拳を突き出した。それをルーナは腕を交差して防いだ。その力に後方へと弾かれる。ざざざ、と足でブレーキをかけ、闘技場から落ちるギリギリ手前で止まる。倒れることは、何とか堪えた。

ルーナはそれから再び攻撃に移り、エイルへと拳、足を飛ばした。しかしどれも避けられ、ガードされる。小柄なルーナの攻撃は、エイルには微塵も影響を与えていない。

ルーナは自身の力の衰えに歯痒い思いをしていたが、観戦する者達は、そのレベルの高い攻防に開いた口が塞がらなかった。エイルとルーナの力量を計る目的を持っていた腹心達も、今まで開かれた大会で、ここまでの力を持った者はいなかったと、それぞれ無意識に呟いていた。

戦闘は、まだ続いている。ルーナには、疲れの色が見えていた。息が上がり、ルーナは肩を弾ませて、構えていた腕は下がりかけている。一方エイルは呼吸の乱れもなく、余裕の表情だ。

「もう終わりにしようか」

エイルのその台詞に、ルーナはハツとする。エイルは駿足でルーナに迫り、顔面目掛けて拳を振るつた。

——やられる！

ルーナはそう思った。ガードはもう間に合わない。ぎゅっと目を閉じ、歯を食いしばる。だが、エイルの拳は当たる直前で、ぴたりと止まった。

「……え？」

痛みや衝撃がこないことで、ゆっくり目を開けたルーナ。眼前には、エイルの拳。

「俺がアンタを殴れると思う？」

言つと、エイルは人差し指でルーナの額を弾いた。

「いたっ」

「降参しな」

「……うん」

これ以上足掻いても勝ち目はないと悟っていたルーナは、審判に参りました、と告げた。その瞬間、審判はエイルの腕を掴み、それを天へと上げた。

「優勝者、エイル！」

審判のその声に、会場から大歓声が上がる。勝者を讃える言葉が飛び交い、また、準優勝であるルーナを労う声もあった。

レイス達は、それを満足げに見つめてから、腹心達に目を向ける。「これで文句はないな」

「はい……レイス様の仰せのとおりに」

われんばかりの拍手の中、レイスも立ち上がり、ルーナ達に手を叩く。レイスとアルもそれに続き、ル力は我関せずといったふうに、ふん、と鼻を鳴らした。

こうして、武闘会の幕は閉じたのであった――。

玉座の間に集まった一同。レイスの腹心達は複雑な表情で、皆の旅の計画を聞いていた。エイルは、既にもとの服装に戻っている。

「北の歪みは、アビリオン国にある森で発見された。とにかく、アビリオンを目指そう」

レイスの言葉に、それぞれが頷く。

「北に進むなら、まずはサノレス国に行こう。そことは深い繋がりがある。隣国だしな」

「そう、ですね……父さん」

レイスは、ルーナを見ながら、何故かその表情を曇らせる。サノレスに何かあるのだろうか、ルーナは疑問に思った。

「明朝、出発する。皆それぞれ旅仕度をととのえてくれ。ルーナさん達は疲れてるだろうが、急がなくてはならないしな」

「はい。大丈夫です、レイス様」

答えたルーナに、レイスはすまないな、と告げて、解散を指示した。部屋を出る時も、レリスはずっと浮かない顔のままで、ルーナはずっと気にかかっていた。

「レリス様、どうしたんだろう」

「何が？」

隣を歩くエイルに聞いてみるも、彼はレリスなど見ていなかった。そもそも興味がない。

「何か、途中から表情が暗くて、心配……」

「他人の心配より、自分の心配した方がいいんじゃない？」

「どういうこと？」

分かっていないルーナに、もう忘れたのか、とエイルは呆れた表情だ。しかしそれはすぐに妖しく笑み、ルーナに顔を近付けた。

「今夜は虐めて泣かせるつつつたよな」

「……あ」

途端に、ルーナは血の気が引いていく。何とか避けられないものかと考えたが、エイルに腕を強く掴まれ、自室へと引きずられていった。

14【出発前夜】

部屋に押し込まれると、すぐ、ベッドに放られたルーナは、慌て身を起こす。シーツに包まり、ベッドの端まで後退した。

「ま、待って！」

「待たねえよ」

エイルはベッドに乗り上げ、ルーナのシーツを剥ぎ取る。外套も取り払い、服を捲り上げると胸を露出させた。

「やあつ」

胸の頂に口づけ、ぴちゃりと舌を這わす。ルーナは身体を震わせながら、倒れ込まないように、快感に耐えていた。

エイルは口を離すと、コートを脱ぎ捨てて。ズボンの釦を数個外し、まだ熱を持たない自身を取り出した。

「口開けな」

「え、や、だ……」

拒むルーナの鼻を摘み、苦しげに空気を吸い込もうと口を開けた瞬間、エイルは自身を擦込んだ。こんなことはしたことがないルーナは、涙を滲ませエイルの腰を掴んで離そうとする。

「逆らうんじゃねえ。舌使って舐めな」

夜のエイルの言うことは、聞かなければいけない。そう身体に教え込まれていたルーナは、懸命に舌を使った。次第に、エイル自身が熱を持ち、膨張してくる。むくむくと大きくなるそれは口いっぱいになり、ルーナの喉奥にまで到達する。

「ん！ んん——！」

流石に苦しくなったルーナは口を離そうとするが、エイルにがっしりと頭を掴まれており、それが許されない。ボロボロと涙が零れても、エイルは解放するどころか、そのまま律動を開始した。

「んぐつ、んう！」

喉の壁にまで当たるほど突かれ、嘔吐感を覚える。だが口はエイルの熱い杭で栓をされており、何も吐き出すことは出来ない。呼吸すらままならず、ルーナはつい、エイルのそれに歯を立ててしまった。

「……つてえな」

エイルは頭を放すと、ルーナは途端に離れ、咳込む。涎も飲み込むことさえ忘れ、酸素を取り込むことに必死だった。

「おい。よくも嘔みやがったな」

「ゲホッ。それはっ、エイルのせいじゃない！」

涙声で抗議すると、エイルの眉がぴくりと上がる。口答えしてしまったことを、ルーナは今更だが悔いた。

「生意気な女だな。仕方ねえ……」

エイルはルーナから離れると、ベッドに腰を下ろす。ルーナは困惑気味に、それを見ていた。

「自分でシて見せな」

「何、を……」

エイルの言葉の意味が分からない。ルーナは涙を拭いながら、聞き返す。

「自慰しろって言ってたんだよ」

「え……」

その言葉に、くらりと目眩がした。エイルは何を言っているのか、本気なのかと、ルーナはその表情に焦りの色を浮かべた。

「早くやんな」

「いや……っ」

自慰だなんて、人に見せるものじゃない。そもそもルーナはしたことがないのだ。

「いやじゃねえだろ」

「出来ないよ！」

訳が分からなくなり、ルーナは手で顔を覆って咽び泣く。されるだけで恥ずかしいのだから、自分でするなど、しかもそれをエイル

に見せるなど、ルーナにはハードルが高すぎた。

「やらねえってんなら、裸にひん剥いて部屋の外に出すぜ」

「な……！」

そんなことをされては敵わない。誰の目にとまるのか分からない——いや、誰かに見られては死んでしまう。それならばエイルの言う通りにするしかないのだが、ルーナは羞恥心が凄まじい上に、どうしたら良いのか分からなかった。

「だって……分かんないもん……」

震える声で、そう訴える。エイルは、やれやれと溜め息を吐いた。
「俺がアンタにやってるように弄るんだよ。アソコをな」

「……っ」

エイルにされていること、ルーナには分かっていた。だが、それを自分でやるには恥ずかし過ぎる。けれど、やらなければ、エイルのことだ、先程の言葉は本気なのだろう。ルーナは、恐る恐る秘部へ指を持っていった。

「はぁ……」

エイルがすることを思い出しながら、敏感な突起に触れる。すると甘い痺れが生まれ、ルーナは吐息を漏らした。震える指先で、割れ目をなぞる。

「よく見えねえよ。足広げろ」

エイルの命令に、涙を零しながらルーナは従う。羞恥心に耐えながら、秘部を撫でた。

「んう……あ……」

恥ずかしくとも、快感に声は漏れてしまう。

「指入れてみな」

ルーナはもう逆らおうとはせず、言われた通りに蜜口に中指をゆっくり挿入する。すると、ぞくぞくとした快感が下腹部から頭までを走り抜けた。

もう、止まらなかった。快感に支配されたルーナは、中をくちゅくちゅと掻き回す。

「あぁっ、あん……」

溢れる愛液は滴り、シーツに染みを作った。

「すっげえ濡れてるぜ。淫乱女」

エイルの言葉攻めにも、身体が疼いてしまう。ルーナは、もう自分の指のもどかしい刺激では、物足りなかった。

「お願い……もう」

「あん？」

「欲しい……」

「は。おねだりするまでになったのか」

エイルは、涙を流す瞳を向けてくるルーナに近付き、その蜜を溢れさせている穴に指を二本挿入した。

「ああ！」

ルーナとは違って、長い指は奥まで届く。中を数回擦ってやると、ルーナは呆気なく果てた。

「まだ終わりじゃねえよ」

エイルはルーナを組み敷き、濡れそぼった秘部に熱の杭を押し付ける。ぐぐ、と腰を進ませ、一気に根元まで押し入った。

「あぁん！ やあぁっ」

ルーナの嬌声は、月が沈む頃まで、部屋に響いていた――。

レイスは一人、自室で、女性の絵画を見つめていた。その下のきらびやかな棚には、様々な色とりどりの花が供えられている。

絵画の女性は美しく微笑んでいる。その女性は、レイスが生まれた時に亡くなった、レイスの最愛の妻。

「行ってくるな。リディア」

レイスは笑んで、絵の中のリディアの頬を、優しく撫でた――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5467j/>

LEGEND

2010年10月9日18時41分発行